

# 『ルーシー・ボストン 館の魔法に魅せられた芸術家』 (国書刊行会) 各章の概要と執筆 (翻訳) 担当者

## 【番外】ルーシー・ボストンとその生涯 (ダイアナ・ボストン/林望訳)

ダイアナ・ボストンが、義母ルーシー・ボストンの生涯を振り返ってまとめたもの。林望訳『ボストン夫人のパッチワーク』(平凡社、2000年)より再録。

## 第一部 文学作品

### 1. ルーシー・ボストン——生まれながらの児童文学作家 (田中美保子)

マナー・ハウスとの出会いから小説家として世に出るまでの経緯をボストンの伝記等を手がかりに考察したもの。ボストンの並外れた聴覚と、自身に宿す「子ども」との結びつきが、作家ボストンを生み出したことを論じている。

### 2. 古きよき静寂の音——ルーシー・ボストンと「グリーン・ノウ物語」シリーズの世界 (ヴィクター・ワトソン/田中美保子訳)

ボストンの代表作「グリーン・ノウ物語」について、各作品ごとに詳細に分析・考察した論考。「帰郷」「歓迎」「言葉で描いた絵画」などのキーワードを軸に、このシリーズが、ボストンという小説家の魅力をいかにあますところなく表現しているものかを詳らかにする。

### 3. ルーシー・ボストン「グリーン・ノウ物語」シリーズ——文学ジャンルのパッチワーク (キャサリン・バトラー/香川由紀子訳)

「グリーン・ノウ」シリーズにおいて、ボストンが多様な文学ジャンルを用いることにより、各巻ごとの魅力の創出に成功していることを詳細にたどった論考である。植栽やパッチワーク、いずれの芸術活動においても変化と安定のせめぎ合いに鋭い感性を見せたボストンが、創作活動においてもまた同様の感性を発揮している様子が明らかにされている。

### 4. 「グリーン・ノウ物語」シリーズにおける語り、音、時間 (菱田信彦)

「グリーン・ノウ」シリーズの最初の2作について、出来事が誰の視点からどんな言葉づかいで語られるかという「語りのスタイル」の分析を行う。作品の時間イメージや作者のメッセージにそれがどう関わるか考察する。

### 5. グリーン・ノウの音、匂い、手触り——「グリーン・ノウ物語」における場所の感覚と身体感覚 (磯部理美)

「グリーン・ノウ物語」における身体感覚と場所との関係に着目した論考。それぞれの物語に登場する子どもたちが、彼らのアイデンティティの源泉、あるいは普遍的な「守り」としてのグリーン・ノウという場所を、聴覚、嗅覚、触覚といった身体感覚を通して経験していく様相を読み解く。

### 6. ほこりをかぶった箱——怪奇小説に着目して (ブライアン・J・シャワーズ、海老塚日菜子訳)

児童文学作家として愛されるボストンの作家性を怪奇小説の視点から再考察した論考。なかでも短編「忽然と」(“Just Like That”)に描かれる登場人物たちの関係をボストン自身の人間関係と重ね合わせ、同作を読み解いている。

### 7. 文学作品と挿絵

#### (1) ピーターの挿絵 (ダイアナ・ボストン/田中美保子訳)

#### (2) とびきり幸せなパートナー——ルーシー・ボストンとピーター・ボストン (ヴィクター・ワトソン/田中美保子訳)

唯一の例外をのぞいて、ボストンの全作品に一人息子ピーターの挿絵がついている。それらを一つ一つの作品との結びつきや表現されたものに注目して丁寧に読み解く。挿絵を軸に読み解いた結果、ボストン作品の全容を探る優れた作品論にもなっている。

### 8. 生の息吹、悲喜こもごもに——「グリーン・ノウ物語」シリーズ以外のルーシー・ボストン作品 (ヴィクター・ワトソン/香川由紀子訳)

未訳の作品、*Yew Hall* (1954)、*Persephone* (1969)に加え、幼年向け5作品 *The Castle of Yew* (1965) *The Sea Egg* (1967)、*Nothing Said* (1971)、*The Guardians of the House* (1974)、*The Fossil Snake* (1975)を丹念に分析した論考である。ボストンが一貫して関心を寄せ続けた「館」と「時の神秘」という主題や、少女や子どもの多感さが、彼女の筆致によっていかに描き出されたのか解説している。

### 9. 熱く細やかな眼差し——ルーシーの詩 (ジル・ペイトン・ウォルシュ/山内久明訳)

1977年に私家版として750部限定出版されたボストン唯一の詩集 *Time is Undone*には25篇の詩が収められている。その主題(自然と愛)と詩法の特徴を掘り下げて論ずる。

## 第二部 その他の芸術作品

### 10. ルーシーとパッチワーク作品

(1) ルーシー・ボストンとそのパッチワークについて (ダイアナ・ボストン/林望訳)

(2) 緒言 (ルーシー・ボストン/林望訳)

(3) ルーコック博士のパッチワーク—あとがきにかえて (林望)

ボストンがその芸術性と鋭敏な頭脳をあますところなく発揮した芸術作品としてのパッチワークについての概要と、そうした作品と他の芸術活動(創作や造園など)との関わり、ボストンのパッチワークの魅力や独自の特徴などを浮き彫りにしている。

いずれも、林望訳『ボストン夫人のパッチワーク』(平凡社、2000年)より再録。

### 11. 針仕事に見るルーシー・ボストンの人生と文学 (香川由紀子)

「グリーン・ノウ」シリーズ第二巻、『グリーン・ノウの煙突』(*The Chimneys of Green Knowe*) (1958)から針仕事の描写を拾い上げ、自伝 *Memories* (1992)を参考にボストンの生涯と重ね合わせることで、彼女が針仕事と執筆というふたつの創作活動にどのように向き合っていたかを考察している。

### 12. ルーシー・ボストンの庭 (安藤聡)

ルーシー・ボストン自身が造園したくザ・マナー>の庭と、ボストンの作品に描かれたくグリーン・ノウ>の庭の双方を解釈することによって、庭が暗示する意味と作品の主題との関係を考察している。

### 13. ルーシーの庭造り<インタビュー> (ダイアナ・ボストン/小川晶子訳)

2013年1月に東京女子大学で行われたダイアナ・ボストンへのインタビューを収録。ダイアナ・ボストンの生の声でルーシー・ボストンと庭のあり方を紐解いている。

### 14. ルーシー・ボストンの絵画 (ダイアナ・ボストン/前野咲訳)

ルーシー・ボストンの芸術活動のひとつである絵画について紹介している。数年間ではあるがエネルギーに取り組んでいた絵画を通じて養った芸術性は、後のパッチワーク作品に遺憾無く発揮されたことがうかがえる。

## 第三部 ボストンをめぐって

### 15. ルーシー・ボストンが愛した二つの音楽 (鳥越けい子)

楽器やレコードによる「狭義の音楽」に対し、森羅万象が奏でる音の世界を「広義の音楽」と位置づけ

それら「二つの音楽」を手掛かりにルーシー・ボストンの人生を歩みを考察したもの。その論考はボストン文学における「環境意識」「土地の記憶」「静寂の意味」等の理解にも繋がる。

### 16. ザ・マナーの音をめぐる追憶<講演録> (林望)

科研費によるプロジェクト「Lucy M. Boston 研究:音響感覚を切り口として」の一環として、2015年12月5日に東京女子大学で行なった講演会(公開研究会)の筆者の講演録。『イギリスはおいしい』『イギリスは愉快だ』など、ボストン邸アネックスでの生活等から生み出されたイギリスをめぐる名エッセイで知られる著者が、「音」を軸にボストンとの日々を追想する。

### 17. ルーシー・ボストンさんからの手紙 (長沼登代子)

ルーシー・ボストンから著者が受け取った3通の手紙を収録。その内容(主に執筆者が翻訳した *Nothing Said* (『リビイが見た木の妖精』)と背景の説明に、自筆手紙の写真、それを活字に直したものとその和訳を添えてある。

### 18. ルーシー・ボストンの思い出

(1) ルーシー・ボストンを偲ぶ<メモリアルサービス> (ピーター・ホリンデイル/山上紗苗訳)

(2) ルーシーの思い出 (ケネス・ボストン/山上紗苗訳)

(3) 間奏曲—グレイト・ウーズ川は静かに流れる (ケネス・イースト/吉野光訳)

(4) 幼いころの思い出 (フランシス・リネハン/前野咲訳)

Diana Boston, *Lucy Boston Remembered* より抜粋して訳出したもの。偲ぶ会での弔辞のほか、個々によせるボストンの思い出が綴られている。

### 19. ルーシー—時を経て振り返ると (ジル・ペイトン・ウォルシュ/吉野光訳)

児童文学作家仲間であり、同じ村に住む友人であったジル・ペイトン・ウォルシュが、ボストンとの思い出や、様々な創作物や活動で独創的な才能を見せた人となりを回想する。

### 20. ルーシー・ボストンからの伝言<講演録> (ルーシー・ボストン/田中美保子訳)

1972年5月22日に、イギリスのレディング大学ブルマーシー校で行なったボストンの講演録を訳出したもの。地球環境汚染や自然破壊が進む現代社会のありようについて強く危惧するボストンのメッセージが貫かれている。50年の歳月を経た今日でもまったく古びることなく、示唆に富む警告として読める。ボストンから我々への貴重な伝言である。